かごしま文化を語る

大崎・神領10号墳の武人埴輪

古墳時代史 解く大隅

橋本　達也
（鹿児島大学総合研究博物館助教授）

はしもと・たつや氏　1996年、早稲田大学大学院修了。徳島大学助手を経て2001年から現職。

両手ではさむように上へ取り上げた瞬間、時が止まったような感覚に襲われた。持ち上げたものの下をのぞき込んでみる。顔だ！

今夏、三週間かけて行っていた大崎町の神領10号墳での調査終了前日のことだ。武人埴輪の発見である。これより前、すでにこの埴輪は冑形埴輪として発表していた。そのため、再度あらためて発表することとなった。

なぜ、最初から武人埴輪と考えなかったか。それは、この古墳の時間と空間だ。築造は五世紀前半から半ばだと考えられる。そして大隅という南九州地域にある。埴輪といえば踊る人、武人、巫女などが一般によく知られる。それらはいずれも六世紀に群馬や埼玉などの関東の古墳に立て並べられたものだ。西日本ではそもそも人物埴輪が少ない。また、人物埴輪を古墳に立てるようになる出現期（五世紀前半）の資料は全国にも数例しかない希少なものだ。

だから当初は、この時期に一般的な器財としての冑形の埴輪だと考えたのだが、いい意味でその認識は裏切られた。

私は二〇〇二年から鹿児島県内で古墳の発掘調査を始めた。鹿屋市串良町の岡崎古墳群、南さつま市加世田の奥山古墳、神領10号墳と調査を進めてきた。同じ時期から大隅地域の古墳の調査が地元行政などでも行われるようになってきた。大崎町の下堀遺跡、肝付町の塚崎古墳群、鹿屋市の薬師堂の古墳など重要資料が増加しつつある。

これまでにも、もちろん古墳の調査は行われてきたが、近年の調査成果は従来の一大拠点であったことを明らかにしつつある。武人埴輪からは巨大前方後円墳の横瀬古墳（大崎町、国指定史跡）を中心とした有力者たちと、古墳造りの本場である近畿との交流がうかがえる。このように、今、多くのテーマが現れつつある。

三世紀半ばから六世紀までの古墳時代は、日本列島に広域の政治的・文化的共通圏のできあがる古代国家形成過程の時代である。「日本」という枠組みの形成を考える上で、古墳時代の社会の地域相の研究はきわめて重要だ。その鍵の一つは鹿児島の古墳時代研究が握っている可能性は十分にある。これらのテーマをひもとく作業は始まったばかりだ。

現在、鹿児島大学総合研究博物館では近年の発掘調査資料を中心に、十七日までの予定で特別展を行っている。ぜひ、武人埴輪を含めこれらの資料を多くの方々に見ていただきたい。

以上により具体的な鹿児島の歴史像を語り始めている。例えば、塚崎古墳群の築造は確実に四世紀代にさかのぼり、鹿児島でも前方後円墳などの築造が他地域に遅れることなく始まったことを明らかにし、従来の辺境観は一掃されたといってよい。塚崎、岡崎、下堀などで出土した五世紀半ばごろの豊富な初期須恵器は大隅地域が地域間広域交流

出土した武人埴輪の特徴は、そのリアルな表情。ほおの肉付き、鼻のカーブ、歯も差し込んだとみられる口元などきわめて写実的